
花街～菖蒲～

近江駆琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花街の菖蒲

【Zコード】

Z2045Q

【作者名】

近江駆琉

【あらすじ】

『花街』。そこは『外』と隔離された歓楽街。菖蒲はその中でも高級娼館である紅伽楼（こうがろう）の花魁であった。夢に向かって前向きに暮らしていた菖蒲が出会ったのは、先に夢をかなえた人物であり、客でも花街の人間でもない『外』の男、遠藤だった。遠藤に出会い、菖蒲は夢に向かっていく

からん… るるん…

日が落ち、賑わい始める花街。高級娼館『紅伽樓』^{コウガロウ}でも、見世の準備がせわしなく行われていた。

そんな喧騒はどこ吹く風、とばかりに、その広い中庭で一人の遊女が散歩をしていた。

年の頃は二十歳に届いた位だろうか。しつとりと濡れたように輝く長い黒髪を背に下ろしたまま、鮮やかな深紅の布地に金の刺繡の入った着物を纏っていた。

下駄を軽やかに鳴らしながら、まわりを気にするでもなくゆっくつと歩き、時たま咲き誇っている花ばなに視線を落としている。

「見ない顔だな…」

その姿を楼の2階から見下ろしながら呟くと、それに気が付いたこの主人である藤里が庭に目を向けた。

「ああ、菖蒲ですよ。あの子が外に出ているなんて珍しい。今日は客をどうないつもりなのかな?」

優美な着物は花魁の証。だが、この時間にやつべつしているところは、どこかの旦那が彼女の時間を買い占めているか、今日は見世に出ないかどちらかだ。

「菖蒲は匂でもあまり外に出ないから今まで会わなかつたのでしょうか。よく働くし、旦那もたくさんつくる家の売れっ子ですよ」

「ふうん…」

遠田だが、高級娼婦にふさわしい、美しい顔立ちをしているのがわかる。

パチン…

「王手」

しばらくぼんやりと女の姿を眺めていたが、その声で視線を将棋盤に戻す。今は賭け将棋の真っ最中であったのだ。

「…お前、俺が見てない間に駒を動かしただろ。」

「そんなわけないですよ。さあ、早く打ってください」

一手前までは優勢だと思っていた盤上は、藤里の一手で絶望的な状況になつて、悩む俺に対して、藤里はいつもと変わらずに一口しながら急かしてくる。

「ダメだな、俺の負けだ。ちつ……」

俺はしばらく悩んだが逃げ道がないことがわかりあつたと投げ出した。だめなものは粘つてもし彼方ない。負けた俺は流儀にならつて、盃の酒を一気に飲みほした。

「さて……これで3勝0敗。まさか盃3杯で酔いがまわりはしませんよね？もひとつ勝負といきましょ。」

田が落ちて、もう一刻もしないうちに見世を開ける時刻だといつに藤里は気にもとめない様子で言つ。

「つたぐ……見世はいいのか？将棋なんてしてないで仕事しろよ」

そつ言こつとも一度も勝てずに終わることにするのは癪なので盤に駒を並べなおす。

ふと中庭を見るともつれこに菖蒲の姿はなかつた。

すつ…と音もなく紅伽楼の重厚な門が開かれると、既に道に停められた黒塗りの車からさつそく幾人かの旦那が降りてくる。

「いらっしゃいまし」

「ようこそ紅伽楼へ」

「おひれしゃいひやります」

見世の入り口では下仕えである遣り手や、花魁見習いの禿カムロが客の相手を始めている。変わっていく雰囲気をどこか遠くで感じていると、部屋付きの禿が声をかけてきた。日頃菖蒲は客を取らない事がないため、どうすればいいか困ってしまったらしい。

「あなたも今日は好きにしなさい。お仕事をしてゐ人の邪魔にならないようにね」

そう言つて禿を下げさせお茶の準備を始める。今日は前々から頼んでおいた本屋が『外』から来る予定なのである。花街に昼間出入りする事が許されているのは一部の業者だけなため、そこから手に入らないものは、わざわざ夜に見世に来て、届けてもらつもうつしかないのだ。

(見世が開いてくる日には客をとらないなんていつぶつだらう…)

他の遊女が働いている中、自分ひとりが休むのはなんだか申し訳ない気持ちになる。だから、遊女のなかには客をよくふって休む者もいるが、菖蒲は求められるかぎり応えてきた。

そうしてなんだか落ち着かない気分でいのちに、遣り手が待つていた馴染み本屋を部屋に案内してきた。いつもなら、見世が休みの日に来てもらつていいので、楼を満たす艶やかな空氣に心惹いた。本屋はいくつかの書物を置いていった。

(…花街のなかにも大きな書店くらいあればいいのに)

この花街は機能的には『外』の世界と変わりはない。役所、病院、デパート、娯楽施設まで一通りの施設がそろつ町なのだ。しかし、菖蒲の求めるような専門的なものまでは網羅していない。

そういうものは、『外』の世界から取り寄せなければならぬ。

「おや… こんな時間に珍しい。誰の所に來ていたんだい？」

見世はとっくにあいたのに、藤里は相変わらず俺と将棋を打つていた。するとそこに、客以外の外部の人間の訪問の報告がきた。

「こんな時間に来るなら間夫だろ？ よ」

花代を払わずに登樓する人間なんて、それ以外に何があるというのか。将棋盤を睨み付けながら俺が指摘する。なかなか次の手が決まらないのだ。

「菖蒲さん！」。いつもの本屋ですよ。」

「へえ… いつも、ね。いいのか？」

あまり待たせるのは格好がつかなくて、パチンと駒を打ちながら藤里に言う。金にならない間夫なんて、楼にしてみれば疎ましい存在だ。しかし、藤里はパチリと嫌な手を打ちながら飄々答えてくる。

「間夫じゃないですよ。菖蒲は趣味の関係の本をよく取り寄せていますから」

「へえ…花街じゃ手に入らないような本を好むなんて珍しいな」

藤里の手に、とつとう格好もなく歎んで俺は腰をさるを得なくなつた俺に、藤里もた盃を干すのに飽きたのか、提案をしてきた。

「もうこれで8勝0敗ですし、これで終わらにしまじょうか。その代わり、私が勝つたら菖蒲に教えてあげてくださいませんか?」

「うひせえな…将棋は苦手なんだよ。教えるって何を」

結局あれから5戦もしているのに、未だに俺の白星はない。これが地だとわかついても笑みを崩さずに、過激なことを言つ藤里にいいらこらしてきた。

(「」で金を動かすのはな…)

「あなたの専門分野でしょ。洋画ですよ。…まあ早く打つてください。」

「あー…よひ、じうだー…」

藤里の言葉を聞き流しながら、俺はやつと活路を開く一手を見つけた。パチリ、と乾いた音がこの時ばかりはいつも以上に良い音に聞こえる。

「いい手ですね…」

「菖蒲は洋画がすきなのか?まあいいぜ。その代わり俺が勝つたらお前の酒のコレクションから一つもらひ」

今日初めて藤里の手が止まる。それに気を良くして、俺はその賭けを飲んだ。藤里のコレクションは遊郭の主人なだけあって豊富だ。

「どうぞ……はい、王手です」

しかし、平然と藤里は終わりを告げた。

ざわざわ客が明けの闇のなかを帰つていぐ。花街の昔からの留わしで、客は夜明け前には帰らなければならない。夜が明けてしまつと大門が閉められて、客は別の小さな門から帰ることはできるが、その口は楼に泊まるとみなされその分料金がかかるのである。

「またいらっしゃいまし」

「お別れするのが寂しうござります」

「お体に気をつけ」

豪奢な着物を艶かしく羽織つた遊女達が客を見送る光景は、花も黙つてしまつような煌びやかさである。そんな光景を菖蒲が2階の廊下から眺めていると主人が声をかけてきた。

「おはよづ、菖蒲。昨夜は客を取らなかつたんだね」

「藤里様、おはよづであります。すみません、勝手をしてしまー…」

たまに休みを取ることなんて珍しいことでも、悪いことでもないけれど、なんだか氣まずくて謝ると藤里はにこりとしていた。

「たまにはいいさ。姫神ひさかみのように働く日の方が少ないようじや困るけどね。『外』の本屋が來ていたんだろう、洋画の関係かい？」

「ええ…あの、そちらの方は？旦那様ですか？」

藤里の隣にいる、見たことのない男性。誰か遊女の旦那ならそれなりの態度を取るべきだが、なんだか雰囲気が違う。どこかの楼の主人だろうか。先ほじから気になっていたのは、自分をまじまじと見ている男の視線だ。

「ああ、彼は遠藤さんと言つて洋画家でいらっしゃる。ちゅうじ菖蒲に紹介しようと思つていたんだよ。『外』の方が誰かの旦那様ではないからね」

「遠藤要だ。ようじくな、菖蒲」

洋画家の先生、と聞いて私は驚き、密でも、花街の関係者でもない一人の男性にどう接していいかわからなくなってしまった。困っている私に、遠藤様は手を差しのべてきた。多分、握手を求めているのだ。慣れない挨拶に、おずおずと手を差し出すと、温かく、大きな手がそっと私の手を包み込んだ。

「菖蒲と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。」

なぜか怖々と手を差し出してくる菖蒲に、とりあえず怖がらせないよつこ、と俺はその白魚のような手を包み込むようにして握った。近くで見るその顔は思つていたよりずっと幼くて、昨夕に中庭を歩いていた時のしつとりと色香を感じませた彼女とは、ずいぶん印象が違う。

(…意外だな。こんなに幼い顔立ちだったのか)

「…あ、あの…」

ついつい、じつと観察していると、田があつた菖蒲は、ぱっと顔を伏せてしまった。なにか言つたそな彼女を遮つて、呆れたようこの藤里が口を出してきた。

「遠藤さん、女性をまじまじと見るのは失礼です。それに、菖蒲が怖がつてこますよ」

「え…ああ、悪い悪い」

「さて、菖蒲。彼にあなたに洋画を教えて頂くよう頼んだのですが…よかつたらどうだい?」

「えつ…ぜ、是非お願ひしますーーー」

興奮に瞳を輝かせて菖蒲は綺麗に腰を折つた。

「俺がつまべ教えられればいいんだけどなあ……」

「では毎週水曜日の午後にお願いできますか？前日が休みなので確実に密がいませんから」

俺は藤里の提案を承諾した。

将棋に負けたことがきっかけだったが菖蒲と話してみると教えるのも苦ではなくさうだった。

それからは仕事前の菖蒲に洋画の歴史や見方、技法等を教えるのが習慣になった。

菖蒲は専門書を読むだけあり、基礎的な知識はしつかりしていくにつた3ヶ月でほとんど教えてしまった。

「勉強の調子はいかがですか？」

いつものように菖蒲と過ごした後、華やかな雰囲気のなか酒を飲んでいると藤里が尋ねてきた。

「さすがに飲み込みが早いな。もつそろそろお役御免だ」

あとは本人が努力するしかない。

「そうですか。ではせっかくですから菖蒲に何か描かせて見ましょうか…」

藤里は遊女が年季があけた後のために様々な後押しをしていく。

「…そうだ。あなたにモテルをお願いしましようか」

「俺…? わざわざむず苦しい男じゃなくて、楼の娘がいるだりつ」

突拍子もない藤里の言葉に驚いた。

「菖蒲が見慣れていないもののほうがいいんですよ。『ひの子の姿』絵なんて見慣れていますからね」

「確かにそうかもしれないけどな…断る。モデルなんてめんどくさい」

画家であるからこそモデルの大変さを知っているのだ。

「では私と賭けをして私が勝つたらお願ひできますか？負けたらこの間おっしゃっていた古酒をお譲りしますよ」

藤里のコレクションの一つであり値段が時価という逸品である。

「まじか！？」じゃ、いいぜ。ただし将棋以外でな

そして、次の水曜日。

「…ところで遠藤さんをモデルに一枚書いてみなさい。期日は1ヶ月。教わった成果を楽しみにしているよ」

藤里はにこやかに、しかしゃんわりとフレッシュヤーをかけて呟いた。

「は…はい。頑張ります」

「ひして俺はもじばらぐ、毎週菖蒲のところに通つことになった。

「俺のような素人でぱつとしない男がモデルで悪いな。旦那の中にはもつと見目のいい奴がいるだろつ」「ひ

「遠藤様よりいい旦那様なんてそうはさせんよ」

菖蒲は「デッサンの準備をしていた。

「ま、俺は口を出さないから好きにかけ。…で、どんな絵にするつ
もりだ？」

今の格好は少し派手な着流し。

菖蒲の答えによつては着替えなければならぬ。

「くつろいでいらっしゃつて結構ですよ。どんな構成かは内緒です」

クスクスといたずらっぽく笑いながら菖蒲は「デッサンを始めた。

「お前がどう考へているか知らんが…油絵を1ヶ月で仕上げるのは
大変だぞ？」

油絵は絵の具を重ねるには一度乾かさなければならない。

「とりあえず明日明後日は棲に泊まつてゐるから、昼間時間があるよ
うなら早く「デッサンをすませてしまえ。そうすればモデルも終わり
だし、集中してできるだらう」

菖蒲が「デッサンを始める」とたんに遠藤は暇になつてしまつ。

(もう… いいやるかな。 どんな絵にするつもつなのかなは楽しみだが)

「 薔蒲 」

「 はい? 」

名前を呼ぶと手を止めて、顔を上げて答える。

「 作業は止めなくてい。 しゃべっていたら集中できないか? 」

「 いいえ、大丈夫ですよ 」

そう言つて薔蒲は再びテッサンに戻つた。

「 セツカグだから話をしよう。 今せうだが、歳はいくつだ? 」

今まで洋画を教えてばかりで個人的な話はしたことなかった。

「 21ですよ。 遠藤様こそおいくつですか? 」

「 21か… じゃあそろそろ下の教育を任せられるようになるな。 薔蒲からみたら俺はいくつに見えるんだ? 」

意地悪く笑つて尋ねると薔蒲は困ったような顔をした。

「 俺は旦那じやないから持ち上げなくていからな。 当てたらなにか? 」褒美をやるよ

「『』は美しいですか？本当にあてちゃこますよ」

そう言つて菖蒲は俺をじつと見つめた。

「今さら見たつて変わらないぞ？」

それにモテルの事は最初によく観察をして雰囲気をつかんでおくものだ」

「改めて見たくなつたんですよ。

うーん… 藤里様が32歳でいらっしゃるのでそれ以上ですよね…」

器用に『テッサン』を続けながらも真剣に悩んでいたようだ。

「そんなお歳には見えないんですけどね。遠藤様も藤里様も」

「いや… 藤里はそろそろやばいぞ？ 仕事もしないで毎晩酒を飲みながら将棋ばかりしてゐるからな。

メタボリック予備軍だぞ」

もともとの線が細い藤里だから今はまだ大丈夫だが、そろそろそれもいかなくなるだろ？。

「えーーー！ それは考えたくないです… でも遠藤様も藤里様と同じ生活に見えますよ~」

「おこおこ… 僕は毎日紅伽楼にいるわけじゃないぞ？ りちゃんと仕事をしているし、ジムに通つたりもしてる」

菖蒲からみたら俺と藤里は確かに同じように見えるだらう。

「ちよつと話がずれたな…で、いくつだと思ひ？」

「えりですね…三十、うーん…三四年?」

本当にわからないように首を傾げながら菖蒲が答えた。

すると遠藤は盛大に笑い始めた。

「あはははっ…菖蒲はまだまだ見る目がないな。旦那に騙されないよう気につけたほうがいいぞ?」

あんまり笑つてしまつたので菖蒲はむつとしたかと思つたが、予想に反して驚いた顔をして手も止まつていた。

「どうした? そんなに驚いた顔をして」

すると菖蒲は怪訝な顔をして言つた。

「眞面目に考へて出した答えだったのですが…そんなに笑われると言つことは検討違つて事でしょう?
いつたい本当はおいくつなんですか?」

「44だよ。藤里より一回り上だ」

すると少しの間を開けて菖蒲が大きな声を出した。

「えー!…ほ…本当ですか?」

「嘘をつくわけないだろ? 菖蒲の倍以上にもなる。
…手を動かせ。ここまでたつても終わらないぞ」

そつぱうと菖蒲はまつとしてまたデッサンに取りかかった。

しかし随分と動搖しているようだ。

(そんなに驚かれるとは思わなかつたな…話題には気をつけないと)

そんな菖蒲の様子を見て俺は思った。

その後は俺は菖蒲の集めた画集をみて過りし、菖蒲の部屋を出た。

夕陽が鮮やかに中庭を照らしている。

ふとその光景を描きたくなり、俺はスケッチブックを持ち出した。

菖蒲に刺激を受けたのか開門まで集中してスケッチをした。

門が開くと楼のなかはまた排他的で艶やかな空気が濃くなつた。

「ハハハ…

そろそろ正午にならうかとこいつに藤里の部屋を誰かが訪ねてきた。

「誰だい？お入りなセー」

「失礼します。おはよーい」わざわざ、藤里様

訪問者は菖蒲であった。

「菖蒲か、おはよう。じつしたんだい？時間が空いてるのなら遠藤さんに来ていただきなセー」

遠藤は既に浴室のようになにか使つてこる密室であるだけ。

「ええ、一時からお願ひしてあります。

実は藤里様にお聞きしたい事があります…」

「なんだい？」

藤里はこのタイミングで菖蒲が尋ねたいことなど遠藤のことだらつと予想をつけた。

「遠藤様なのですが…」

そのままで言つて菖蒲はためらい、言葉を詰めりせた。

（なにがあったんだ？まさか遠藤さんが菖蒲に手を出すとは思えないと
いが…）

その様子に藤里はありぬ邪推をしそうになる。

いぐり遠藤でも商品である楼の娘に手を出せたら黙つてほこられ
ない。

「あの……お歳が44歳つてこりのは本当ですか？」

……

部屋に少しの間沈黙が落ちたあと藤里が口を開いた。

「なんだ、そんなことか。そうだよ？」

確かに見た日は30歳位にしか見えないけどね……」

すると菖蒲は安心と驚きの混じった表情をした。

「一瞬聞いたらいけない事がと思い緊張しましたよ。
本当にそななお歳になるんですね。驚きました」

「いや、菖蒲があんまり真剣だったからなんの話かと思つていたん
だよ。
さあ、用事はすんだかい？頑張りなさい」

やつぱり菖蒲を送り出した。

約束の時間に俺は菖蒲の部屋を訪れた。
昨日とそつ変わらない着流し姿だ。

「さて、改めて何かわからないところはあるか？」

実際にやつてみるとわからなくなることも少なくない。

「いえ、うまくいってます。すらすらといイメージができるので、
今日で『デッサンは終わりにできますよ』

「さうか、それは完成が楽しみだな」

そう言って俺は暇をつぶすために盃を傾け始めた。

じまじくすると菖蒲が話しかけてきた。

「遠藤様と藤里様はどのよのうなご関係なんですか？」

学校の先輩後輩の関係かと思つていましたが、まさかそんなに年が
離れていらっしゃったんですから……」

「ああ、似たようなものだ。兄弟つて言つた方が感覚は近いか。
俺は露富の生まれなんだよ。だからまだ花街から出たことのなかつ
たあいつにいろんな事を教えてやつてたのさ」

あつさうと言つた俺に対しても菖蒲は驚いたようであつた。

「遠藤様は……露富の『出身ですか?』と、言つてはお母様は……」

「遊女だった。珍しいだろ？今もだが、昔も遊女の子なんて数もないし、みんな花街の仕事についているからな」

露宮でもある年齢までは学校に通うが卒業後はたいていお世話になつていた見世で働く。

学校に通つている間は花街から出ることは許さないことが原因だろう。

また遊女の子供は花街の中でもあまり風当たりがいいとは言えない。

「それは『苦労をされたのですね。話にくい事を失礼しました』

「別にいいさ。それに俺は苦労していないんだ。学校は『外』に行つていたしな。だから藤里にいろいろ教えていたのさ」

藤里の父親はもちろん紅伽楼の先代主人。たった1人の跡継ぎを『外』に出すのを極端に嫌がっていた。

そんな藤里に俺は勉強以外の、花街ではない世界を教えていた。

「だから仲がよろしくのですね」

「まあな。…言いたくなればいいが、お前はいつ頃にこく？」

花街の遊女となる理由は様々だが、多くの場合は大人の都合で売られてくる。

「私がこの露宮に来たのは12歳の時でした。小さな頃に両親を亡

くして身寄りがなく、小学校を卒業してこの世界に自分から入ったのです。

「

菖蒲は淡々と話した。

「へえ、12歳ねえ…最初から紅伽楼にいたのか？それにしては見覚えがないんだが」

俺は昔から紅伽楼をよく訪れていた。しかし、菖蒲を見た覚えは最近までない。

「初めはここのような奥まった所ではなく、もっと大門に近い所にいました。

紅伽楼に来たのはお客をとるようになった時…17歳の時です」

花街では唯一『外』へ繋がる大門。

大門に近い見世ほど安く敷居が低くなっている。

「4年前か、俺は禿とは話したりするが遊女とは関わりがないからな…」

それにも、紅伽楼に引き抜かれてよかつたな。ちゃんとした見世の方が客も常識的だから」

紅伽楼は露富のなかで最高級と噂されている遊廓の一つである。そのため客の社会的地位高くマナーがいいのだ。

菖蒲と俺はテツサンを続けながら様々な話をした。

菖蒲は禿時代に藤里が目をつけて高値で買い取られたらしい。

年季があけたら画家になりたい」と、田那たちのあれこれなどを話していくうちに夕方になった。

「そろそろタイムリミットだが、テッサンは終わったか？」

「テッサンさえ終われば毎回モーテルがいる必要はない。

「はい…でも、明日までこりつしゃるのですよね？
でしたら明日も付き合つて頂けません？」

菖蒲が不安そうに尋ねてきた。

「別にいいぞ。明日の夕方まではあいてるから、また呼んでくれ。
じゃあ大変だつが絵も仕事も頑張れよ」

そう言って俺は部屋を後にした。

その時の菖蒲のなんとも言えない表情は今となつては俺の言葉に傷ついたんだとわかる。

そして翌日俺はいつもより菖蒲を訪れた。

「菖蒲、俺だ。入るぞ」

そう言って襖を開けた。

するとそこには旦那であろう男と添い寝している菖蒲がいた。

(やばつ…泊まりの客か)

一人ともぐつすり眠っていたため俺はそつと襖を閉め、藤里の所に行つた。

「おー、藤里…菖蒲のところに客がいるなら言えよ。間夫みたいになるところだつたぞ」

「今日も約束をしていたとは知りませんでした。お客様は?」

藤里は困ったように言った。

「一人ともぐつすり寝てたよ、心配するな。さて、夕方に大門が開いたら帰る。しばらく仕事でこれないけど気を付けろよ?」

意味深な言葉に藤里は微笑んで答えた。

「ええ、遠藤さんこそ気を付けないと、うしろから刺されますよ?」

「はいはい、じゃあな」

やつ言つて俺は露顔を出した。

コンコン…

藤里に言われた期限の前日、火曜の朝方に禿が閉門の時間を知らせるために襖を叩いた音で菖蒲は田を醒ました。

「う、ん…」

（もう朝方…旦那様を帰す時間だ。1週間…やつと今日はお休みだわ。つかれた…それに絵は明日が締め切り。さすがに間に合わないな）

遠藤をモーテルにした絵はまだ一度しか色を重ねていない。

これでも進んだ方である。最近、菖蒲を描きするある旦那がよく泊まつていくため昼間も絵を描けない日が続いていたのである。ましてやこの1週間はずつと泊まつていた。

「旦那様、お時間です。起きてくださいませ」

隣でまだ眠っていた旦那を起こす。

「うん？…ああ、今晚は休みか。もう帰らないとだね」

いつものように身支度を手伝つていると真面目な声色で旦那様が話しかけてきた。

「菖蒲、大切な話なんだけど…君を身請けしたい」

はつきりと強固な意思が読み取れ、私は驚いた。

「私を…身請けですか？ですが旦那様には婚約者がいらっしゃるとお聞きしております。

いぐり政略結婚であつても世間体が…」

「ああ…わかっているよ。

君を身請けしても共に暮らすこともできないし、明らかにできる関係にもなれない。

だから条件付きでいい。菖蒲の年季明け、25歳までの4年間でいい。俺の愛人になってくれないか？」

「私を…身請けですか？」

確かに今まで身請けの話がなかつたわけではない。

しかし最近は昔と違い、妻として身請けされていくのが一般的である。

「あ、あの…」

戸惑っている菖蒲に旦那は優しく声をかけた。

「答えは急がなくていいよ。ゆっくり考えてほしい。
本当はきちんと妻として君を身請けしたい…菖蒲、君を愛してるんだよ。遊女としてでなく、一人の女性として」

旦那が帰つた後、混乱はしていたがとにかく藤里に会いに行こうと

菖蒲は部屋を出た。

「ハ……ハハハ…

遠慮がちなノックに藤里は書類から顔を上げ時計を見た。

(4時30分か……こんな時間に誰だ?)

「どうぞお入り下さい」

まだ楼に旦那がいてもいい時間であるために丁寧に対応する。

「菖蒲です、あの…失礼します」

藤里は訪ねて来た菖蒲は客をとるための艶やかな着物をまといたままであるのを不審に思いながら声をかけた。

「旦那様はお帰りになられたのかい?一週間」「苦労だつたね。」

「はい、先ほどお帰りになられました。それで『報告がありまして…身請けをしたい』そうです」

「なるほどね。確かの方は婚約していたはずだが…菖蒲を愛人にとはまた思いきつたことをするね。それで受けのかい?」

藤里が尋ねると菖蒲は小さく首を横に振った。しかし…

「わかりません」

藤里は静かに先を促した。

「旦那様は私の年季が明ける25歳までだと…あと4年花街で過ごすよりは『外』で暮らしてみたいけど、私の方を好きにはなれなくて。でも身請けされれば今よつと縫に時間が割けるし…どうしたらいいのか」

最後には涙声で菖蒲は言った。

「『』みんなさ〜… 藤里様と約束したのに、明日が締め切りの縫も書き終わっていなくて」

「それについては気にしないでいい。ずっと泊まらっていたんだ、仕方がない。明日遠藤さんが来てくださるから見て頂きなさい」

菖蒲は顔を上げた。

「遠藤様が…？」

そうこいつた菖蒲の顔はついたとは全く違い、明るいものであつた。

(…困ったな。もしかしなくとも菖蒲は遠藤さんで惚れたか…)

「最近はお忙しくて来れなかつたが、明日は空けてくれたよつだよ」

考えを全く顔に出さずに藤里は微笑んだ。

「とにかく身請けの話は菖蒲次第だからね。よく考えてみなさい。相談にはいつでもものるから」

菖蒲が部屋を出ると藤里は大きなため息をついた。

（とりあえず身請けの話だな。菖蒲はこれから遊女だからあまり手放したくはないが……いくらにしようか）

身請けなどきれいとを言つたといひで人身売買であり、首利が田目的なのだ。

（あの方の身辺をもう少し詳しく調べさせないと。

‥それにしても、遠藤さんの方は困つた。まさか菖蒲がね‥だが遠藤さんならうまくやつてくれるか。疲れたしお匂にはこりつしゃるようだからもう休もう）

藤里は最終的には遠藤がつましく調整してくれるだらうと丸投げし、眠りについた。

そして毎時、遊女が起きた頃に遠藤は紅伽楼を訪れた。

「よつ、約一ヶ月ぶりか？元気そりでよかつた。」

「遠藤わざといへ、個展の「」成功にお祝い申し上げます。それに展覧会での評価、すいぶんと噂を耳にしますよ。本当におめでとうござります。」

遠藤は先週自身の個展を開いていた。それに加え大きな展覧会で最優秀賞をとったためここ一ヶ月は大忙しである。

「ああ、わざわざ個展を見に来てくれたのに案内できなくて悪かった。ありがとつ」

「といひで…あの絵、じつするんですか？」

「わづだな…いつか菖蒲にやるよ。あいつが花街を出ていく口口でも。ところどころの絵は？」

自分がモデルなのは恥ずかしいが、菖蒲がどんな画風になるのかは興味津々だ。

「それが…わざわざ来ていただいたのに大変申し訳ないのですが、書き終わっていらないんです。」

菖蒲もいろいろあつてここにしませうとして…」

遠藤は肩を落としたよつと言つた。

「そっか……楽しみにしていたんだが」「

「仕方がなかつたんですよ。書きかけですがまたアドバイスをしてあげてください」

藤里がフォローを入れ、遠藤を菖蒲の部屋に促した。

襖が軽く叩かれた。

「菖蒲、私だ。遠藤さんをお連れしたよ」

部屋では菖蒲が絵を書いていた。

「あつ……こりひしゃいませ。お忙しいなか来ていただいたのに終わらなくて。本当にすみません」

「よひ、久しごりだな。元気そうでなによりだが……少し痩せたな。絵ははずいぶんと丁寧に進めていていいが、身体は大事にしろよ?」

すると藤里が口をはさんだ。

「あなたが言えた話ではないでしょ? が……

仕事に没頭すると他のことなんて目に入らないんですから。」「

「はいはい……わい、菖蒲。絵を見せてみる」

「はい、お願ひします」

遠藤の指導が始まつたため藤里は部屋をでた。

(アーティストが描いたよ。遠藤さくら)

「なるほどね…大まかには十分合格点をあげられるできだな」

菖蒲の絵は纖細タッチだが色彩が鮮やかで印象的なできであった。

「ありがとうございます！…本當は完成したものをお見せできればよかったです。」

せっかく遠藤様をモーデルに書くのだから驚かせたかったんですよ？」

「うーん、俺を驚かす、ねえ…菖蒲はどういった点でインパクトを与えたかったんだ？はつきりって構図や背景、色彩、タッチ…特に珍しいところはないだろ？」「…」

すると菖蒲は驚いていった。

「確かに…そうですよね。…全然考えていました」

「お前はこの絵で何を訴えたいんだ？」

人物画を「実的に書きたいわけではないだろ？」

しばらくアシフプロとして厳しい視点のなかにいたせいか言葉や要求がきつくなっていたことに俺は気づかずに言った。

「…すみません。いい絵にしたいといつて精一杯で…」

「つまり何も考えていなかつたんだろう」

「……すみません」

絵から視線を菖蒲に移して俺ははつとした。

菖蒲が本格的に絵を書いたのは「これが初めてである。しかもいくつもの制約のなか書いてきたことを考えると菖蒲の絵はよいできであつたのだ。

「悪い……言ふ過ぎた。初めてなのに無茶言つたな。今度書くときの参考にしてくれ」

「いえ、すぐ勉強になります」

「とにかく、この絵はほの調子でいい。気にするな」

そのあと細かい技法についてしげみへりへ指導をした。

「わい、ほんものだな。頑張れよ」

時計をみるとすでに5時近くであった。

「あつがとうございました。お疲れでしょう、お茶を入れますね。そうこえは……今田は洋装ですね。何かあったのですか？」

お茶を入れながら菖蒲が尋ねてきた。

「別にいつも『外』ではこんな感じだぞ。棲に泊まると着物なだけだ」

今日は午前中に仕事をしてきたためスーツを着ていた。

「やうですね……遠藤様は『外』で暮らしていらっしゃるんでした

ね

菖蒲はなにか思い悩んでいるように視線を落とした。

「…『外』に出たいのか？」

俺の問いかけに菖蒲は下を向いたまま言葉を探していくよひだつた。

「そうですね。出たくないと言つたら嘘になります。『外』にはたくさんの物がありますから…でも、『外』では自分で生きていかなぐちゃ全然今と変わらないんでしょうね」

しばしの沈黙のあと菖蒲が言った。

「身請けの話があるんです」

「菖蒲にも恋仲の男がいたんだな。それにしても嬉しそうではないな…『外』が不安なのはわかるが、一人じゃないだろ?」

俺は菖蒲の言葉を勘違いして言った。

「一人じゃない、ですよね。普通は…でも、私は好きな人と幸せになるために身請けの話がある訳じゃないんですね」

「つまり、ただの旦那の一人から身請けを申し込まれたのか。だったらやめておくんだな。身請けは一生ものだ、後悔するぞ。どうせ年季があければ自由の身。あと数年我慢した方がいい」

菖蒲は俺に自分の言いたいことがうまく伝わらないことに苛立った様子で話した。

「4年間なんです…4年間愛人として暮らせばあとは自由…でも、でも…」

俺は菖蒲の言葉を何も言わずに待つた。

「でも、身請けされたらその間その人のものにならなくちゃいけない…今と違つて向こうの都合に合わせなきやならないし、ただでさえ不安なのに世間の目を気にしながら一人で生きていかなきやならない。

でも、それに耐えられたらいろいろな経験ができますよね。美術館やギャラリーに個展を見に行つたり、今より時間があくだらうからもっと絵を勉強できる……」

「いまで言つと菖蒲は俺の目を見てしつかりとした口調で言つた。

「それに私、遠藤様が好きです。絵の先生としてもちろん尊敬していますが、一人の男性として好きなんです」

その言葉に俺は少し驚いたものの、答えは決まつていた。

「…冷たいんですね。どうして?とか、可能性を全然残してくれなく他の誰ともな」

「…伊達に長く生きてないからな」

しばらくの沈黙の後俺は言つた。

「菖蒲、身請け話を受ける。俺は画家としてお前に期待している。もしお前にやる気があるならこれからも支援したい。4年間は確かに辛いかもしねないが…師としてなら側にいてやれる」

しばらく菖蒲は黙っていたが顔を上げ、意を決したよつて言つた。

「わかりました、身請けを受けます…絵ももちろん続けます。でも、一つだけ…遊女菖蒲として最後にお願いがあります」

「…なんだ？」

「抱いてください」

「明日、藤里様に身請けを取らねど」^レ報せじます。
だから、花街の今までの思い出とこれからのが4年間を過ぐすために
：一晩だけ、一緒に過ごしてくだれ。」

俺は戸惑つた。まさか菖蒲がこんなことを呴つとは思わなかつたし、
その雰囲気にはけして引かない強さがあつた。

（…女ひてやつま）れだから怖い。たつた21歳でこんな田をじや
がむ…）

俺は初めて中庭で菖蒲を見た時を思い出した。

凛とした雰囲気を纏い、一拳一動は纖細。しかし念つてみるとその
瞳には熱いものを秘めていた。

「わかつた」

窓からは田が沈んだ後の薄明かりが差し込んでいた。

俺は菖蒲の腕をつかみ床に押し倒した。

「女を抱く時までいい先生じゃいらっしゃないぜ…いいんだな？」

菖蒲は田を閉じて頷いた。

「ん…ふあ…」

いきなりの深い口付けに菖蒲は濡れた声をあげる。

俺は着物の帯に手をかけた。紺色に銀の花柄の着物の前を開くと若々しい身体に指を這わせる。

「きれいだな」

俺は菖蒲の身体をゆっくりと溶かしていった。

「んあ……はあっ、んっ……」

部屋には密やかなお互いの衣擦れや水音が満ちていた。

「菖蒲、いいか？お前が欲しい……」

俺は菖蒲に負担をかけないようついて尋ねる。

「は……い、きて……」

誘つよつて菖蒲は俺の背に手を回す。
それに応えて俺は身を沈めた。

「うんっ……あつ、あん……遠藤……様」

「（）んな時に様付けか……？要だ」

「かなめ……わん？……はあ、あつ……」

「いい子だ……」

俺が言つと菖蒲はぎゅっと回した腕に力をこめ口付けをしてきた。

「うんっ… 駄洒て… かなめさんっ… あっ、はあ… あんっ」

せつして俺達は互いに求めていった。

「…少し、話を聞いていただけますか？」

着物をはおり俺の隣で横になっていた菖蒲が話しかけてきた。

「前にも少し話しましたが、私が露宮に来たのは12歳の時でした。それまでは施設で大事に育てられてきたんです…」

俺はなにも言わずに耳を傾けた。

「ある日、私は偶然露宮の事を知りました。やりたいこともなかつたし、施設にいつまでもお世話になるのが嫌で…周りの反対を押しきつて門をくぐりました。もちろんどんな所かもわかつていきました」

自分からこの世界に入る人間は少ない。ましてその歳で入つてくるなんてどれだけの勇気だったのか、俺は思った。

「最初はすごく驚いたけれど、みんなに優しい人ばかりですぐに慣れました。17歳になつて遊女になつた時ももちろん最初は悲しくはあつたけど自然に受け入れられたんです。こうして花街を離れる事が決まるといろんなことを思い出します…」

一度花街を出てしまえばなかなか帰つては来れない。

「遠藤様にはわがまま言つて頼りっぱなしでしたが…私、本当に頑張りますから…だから、これからも『指導お願いします』

「ああ、もうひと…だが絵の事とかちやんと四那に話しあべ。4年間つつがなく過ごせるよつこな」

「はー…」

しばらくすると菖蒲は眠つたよつだつた。

頬には涙のあとが薄く残つている。

「…悪いな、菖蒲」

俺は菖蒲を起しこなこよつてひきと身軽度を整えて部屋を出て藤里の所に向かつた。

「…やつてくれましたね」

部屋に入ると藤里は俺を睨んで言つた。

「悪かつた、遊女に手をだすなんてな…」

「本當ですよ…。それで?」

藤里は態度を崩さずに先を促した。

「身請けされるつても、気持ちの整理はわせたつもつだ。俺との事もわせんと決着つけるだろ」

すると藤里は諦めたよつたため息をついた。

「はあ…わかりました…今回だけですよ、本當に。まさか遠藤さん

が菖蒲に手をだすなんてね

「悪かったって…じゃ、やうこいじだからいろいろ頼んだぞ。

菖蒲が『外』に出てからの支援ができるよつと詳細が決まつたら連絡してくれ

俺はそつと部屋を出ようとすると藤里があわててひき止めてきた。

「ちよつと待つてください…!

このまま帰つてしまふ来ないつもりなんですか？菖蒲にはなんて…」

「別に何も？ああ、そうだ。なるべく早くあの絵を送るから、菖蒲が身請けされる時に渡してくれ。じゃあな、またそのつり来るぞ」

今度こそ俺は部屋をでて『外』へとむかつた。

（次に菖蒲に会つといわせ一人の画家としてだ…頑張れよ）

大門をくぐつながらそつと思つた。

2週間後、身請けの日を迎えた。金銭的な問題もなかつたうえに、絵の話なども旦那は全て認めてくれたためにとんとん拍子に話は進んだ。

「失礼するよ、菖蒲。時間だが用意はいいかい？」

藤里が菖蒲を送り出すために部屋へ迎えにきた。

「はい、もう出れます」

「いつにいたのは4年間だつたがよく働いてくれたね。いつも一生懸命な君の姿はみんなのいい見本だつたよ。手放すのは惜しいがこれからは『外』で頑張りなさい。
…これを。遠藤様から菖蒲に。君が花街を出る時に渡してほしいと」

そう言つて藤里は一枚の絵を渡した。

「遠藤様が？ わあっ…綺麗。これは、私？」

その絵は紅伽楼の中庭で花に手を伸ばしている遊女が描かれていた。艶やかな着物や花の造形までとても纖細に描かれている。…もちろん遊女の顔かたちや表情も。

「実は先日遠藤さんは個展を開かれてね。その時にその絵はとても話題になつたんだよ。大事にしなさい」

藤里が眞つと菖蒲は絵をめやつと抱き締めて眞つた。

「はーーーーーすい」嬉しいです。

藤里様、今回のことばー迷惑おかげしました。そして今まで本当にお世話になりました

菖蒲は深く頭を下げた。

大門をぐぐるとそこは『外』。まだまだ本当に自由ではないけれど、自分の選択に後悔は全くなない。

(せよつなり、みんな。

・大丈夫、私は一人じゃない。やりたいこともあるし、遠藤様だつて私に期待してくださつてるんだ。

…うん、頑張るーーーーー！)

空は快晴。

真っ青な空に筆の後のよつた飛行機雲が浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2045q/>

花街～菖蒲～

2011年3月27日18時43分発行